

美術科教科書にみる視覚言語について

福田 隆真

On the Visual Language in the Textbooks of Art Education

Takamasa FUKUDA

(Received November 29,1991)

ABSTRACT

We have six textbooks of art education in elementary school and three in junior high school. Their contents include the two fields of art education that is, expression and appreciation. Before 1977, the field of expression was composed by four fields; picture, sculpture, design and craft. It was from 1977 that they were brought together and turned to be called expression.

In the textbooks of art education, we find the characteristics of elements of art and design, and art of visual language. Elements of art and design are form, shape, color and texture. Visual language is grammar of art as for example, rhythm, balance, contrast and composition. Elements of art and design, and visual language are the basic learning materials.

In this paper, I analyzed the learning materials based on the point of view of elements and visual language. Based on my analysis, I concluded that is important to learn the element of art and design and visual language step by step in all learning materials. The teacher of art education must teach the elements of art and design and visual language in analytic method, especially to high grade of elementary school and to all grades of junior high school.

キーワード：美術科教育、造形要素、視覚言語、教科書

はじめに

美術科教育の内容では、表現の領域として、絵画、彫刻、デザイン、構成、工作・工芸の各分野が昭和52年の学習指導要領の改訂時まで分れていた。この表現領域に加えて、鑑賞領域が並列して扱われている。小学校図画工作科では、同じく昭和52年の改訂前は同様な表現領域の構成であった。題材の精選にともない、これらの領域は統合が為され、「表現」というひ

とつの領域となった。しかしながら、実際の教育実践においては、統合された領域として取り扱われる題材は少なく、従来の分野での題材が教科書の多くを占めている。

本稿では、そうした統合された表現領域の個々の題材において、すべての領域に共通する造形要素と視覚言語の取り扱いについて、実際の小・中学校の教科書を対象として分析することを目的としている。

1 小・中学校の教科書に見る題材例

現在、小・中学校の美術科教育に関する教科書は4社から発行されている。¹⁾ それらの題材構成はその配分からすると類似性を持っている。基本的には表現領域として、絵画、版画、彫刻、構成、伝達デザイン、工作・工芸があり、加えて鑑賞領域がある。小学校図画工作科では、新たに複合的な取り扱いとして造形遊びの分野がある。ここでは、小・中学校の教科書から代表的なものを選びそれらの題材を見る。

①図画工作科の題材例1

○「ずがこうさく」1～2、「図画工作」3～6（日本文教出版 昭和63年）

①1学年

●ぞうけいのあそび

「わたしの がっこう」「すなで あそぶ」「かみで あそぶ」「おべんとう づくり」

●えにかく

「わたしの がっこう」「せんせい あのね」「みつけた こと」「クレヨンは ともだち」「ぞうさんの ながい はな」「こんな こと したよ」「きょう、がっこうで」「すきな どうぶつ」「すきな あそび」「ともだちの え」

●ねんどでつくる

「ねんどの やま」「ねんどで なに つくる」「おおきな こしかけ」

●つかうものをつくる

「たのしい かざり」「こどもの ひ」「おたよりいれ」「うかべて あそぶ」「おべんとう づくり」「とびだせ ロケット」「おはなし こうさく」

②2学年

●ぞうけいのあそび

「あつまれ、あつまれ」「かみぶくろで あそぶ」「だんボールばこで あそぶ」

●えにかく

「おしゃれな かいじゅう」「にじの はし」「よこむきの 人」「こんな こと したよ」「見て きた こと」「ふたりで した こと」「ともだちの え」

●ねん土でつくる

「あつまれ、あつまれ」「ねん土の すもう」「赤かて、白かて」

●つかうものをつくる

「きれいな むねかざり」「はしる ふね」「ほくたちの 町」「すてきな ほうし」「ゆび人形」「とりの かざ車」「けんだま あそび」「おはなし こうさく」

③3学年

●絵であらわす

「ねこと風船」「友だちといっしょに」「お話を読んでかく」「見てきたこと」「体のまがり」
「したこと、見たこと」「モザイクの絵」

●立体であらわす

「二人であそんだこと」「お話をねん土で作る」「わたしの作った人形」

●つかうものを作る」

「お知らせカード」「すんでみたいへや」「小刀で作る」「まよい道」「グライダー」「紙ばねのおもちゃ」「きるもの、かぶるもの」「お話工作」

「くらしとぞうけい」(鑑賞)

④4 学年

●絵で表す

「春を運ぶ神様」「心に強くのこったこと」「体の向き」「ものとまわりのようす」「物語を
読んでかく」「自分のしたこと」

●立体で作る

「動物と旅に」「どちらが強いか」「お話工作」

●使うものを作る

「もようのかわるふしぎなはこ」「板で作る」「スタンドグラス」「つづき絵」「ひもで回る
おもちゃ」「お話工作」

●かんしょう

「人の動きのようす」「くらしとぞうけい」

⑤5 学年

●絵で表す

「ある日の記録」「じっと見つめると」「絵の組み立て」「体のひねり」「物語を読んでかく」
「中心のものを目立たせる」

●ちょうそで表す

「働く人」「動物の形をとらえる」「やわらかい石をほる」

●デザインして作る

「焼き物のすず」「絵本作り」「六角形のはこ」「糸のこぎりを使って」「お話工作」「ロー
プウエー」

●かん賞

「空想の絵」「くらしと造形」

⑥6 学年

●絵で表す

「身近な人々のくらし」「おくゆきや広がりを表す」「物語を読んでかく」「人と人との組み
合った形」「荒海をゆく」「人と人とのかわり」

●ちょうそで表す

「競技する人」「顔の表情」「木をほって作る」

●デザインして作る

「焼き物のつぼ」「ポスター」「1まいの板で作る」「お話工作」「ランドヨット」「動くお
もちゃ」

●かん賞

「遠い近いの感じ」「くらしと造形」

この出版社の教科書は、現在、採択率が一番高いものであり、日本全国で多く利用されている図画工作科の教科書である。内容の構成は、表現の領域が従来までの絵画、彫刻、デザイン、工作の4つの分野からなり、加えて鑑賞の領域がある。そして、新たに1、2学年に、造形遊びの分野が追加されている。

1、2学年では、造形遊び、絵、粘土、使うものをつくる、に分れており、造形遊びは様々な材料体験と造形行為を学習するもので、総合造形の内容である。使うものをつくるは、デザインと工作の内容を総合したものであるが、低学年の場合、デザインするという計画性、社会性が未分化なため、目的表現のなかにデザイン、工作のすべてを含んでいる。

3、4学年では、絵画、立体、使うものを作るに加えて、鑑賞が入る。立体で表すの分野は彫刻と工作・工芸の両分野に繋がる内容である。表現の領域が、絵（平面）と立体という次元のレベルで区別されている点は、従来の分類とは異なっている。

5、6学年では、絵、彫塑、デザインして作る、と鑑賞の4分野によって題材構成がなされている。目的表現のなかに工作が含まれており、それらは行為を示す意味で、デザインして作るという内容になっている。従来のデザインが分野として捉えられていたのに対して、目的に合わせて計画して作るというデザインの概念を直接示したものと見える。そうすることによって、平面的なデザインと、種々の素材による工芸もアイデアの段階から完成までをデザインして作るというひとつの概念で包括することができる。また、高学年では知的な発達にともない、鑑賞の領域が題材として名示されている。

②図画工作科の題材例2

○「ずがこうさく」1～2、「図画工作」3～6（開隆堂出版 平成2年）

①1学年

●せんせい あのね

「みんな だいすき」「すきな ものをつくろう」「すなや みずで あそぼう」「ともだちが できた」「どうぶつの えんそく」

●クレヨンや はさみ、みんな ともだち

「ちぎった かたち」「いろいろな せんから」「つるす かざり」「わたしの てさげ」

●どんな いろ、どんな かたちに しようかな

「しらせたい こと」「わたしの かざり」「つんだり ならべたり」「おはなしの え」

●ほんとうに うごいて いるようだ

「がんばった こと」「どうぶつが あそびに きた」「げきの おめん」

●おもった ことを はっきりと

「かたちあそび」「すいすいひこうき」「のってみたいなあ」「あそんだ こと」「さんぼする どうぶつ」

・「すきな いろは どんな いろ」「およげ こいのぼり」（鑑賞）

②2学年

●ようすを おもいうかべながら

「2年生に なって」「たかい たてもの」「空きばこあそび・かたおしあそび」「なかよしの ともだち」「小とりの いえ」

●かきかたや つくりかたを くふうして

「小さな かたちから」「ゆめの せかい」「水に うく かざり」「どうぶつの いれもの」

●じぶんで 見つけた いろや かたちで

「ああ、たのしかった」「おたよりカード」「みんなで たのしく」「おはなしの え」

●つくりたい ものに なった きもちで

「ともだちと あそんだ こと」「どうぶつの おや子」「かみぶくろで へんしん」

●じぶんの かんがえを たいせつに

「車の パレード」「ストローぶえ」「かわいい どうぶつ」「すごいなあ」「一りん車ゲーム」

・「にている いろは どんな いろ」「見てね おほしさま」(鑑賞)

③3 学年

●かんじたことをのびのびと

「みんなとしっしょに」「絵のぐのせんでかく」「ものをもつ友だち」「ようい、ドン」

●かき方やつくり方をみにつけて

「わ紙をそめて」「こんなに大きくなったよ」「木をけずって」

●形や色のかんじのちがいに気づいて

「お話の絵」「かわり絵カード」

●考えを広げていきいきと

「あそんだこと」「うちゅうのステーション」「まつりのほうし」

●でき上がるまでしっかりと

「トントン人形」「心がはずんだ時」「ビー玉ゲーム」

・「あたたかいかんじの色、つめたいかんじの色」「まつりだ ワッショイ」(鑑賞)

④4 学年

●見たこと、感じたことをすなおに

「かきたい木を決めて」「友だちのようす」「力を合わせて」

●かき方やつくり方を生かして

「楽しいかべかざり」「このごろのこと」「べりな小物かけ」

●形や色の感じを考えて

「物語の絵」「うれしいしょうたいじょう」

●考えをふくらませていきいきと

「自分や友達のこと」「木切れの虫や動物」「歌う人形」

●でき上がるまで粘り強く

「つな登り人形」「心にのこるあの時」「かわるはこ」

・「明るい色、暗い色」「光は友だち」(鑑賞)

⑤5 学年

●自分の目と心でとらえて

「花のある風景」「友だちの動作」「家でのひととき」

●道具や材料の使い方を身につけて

「はりこの仮面」「小さなたな」

●形や色の組み合わせを考えて

「物語の絵」「わたしのことばで」

●考えを深め、表したいことをはっきりと

「わたしのはにわ」「物語のはん画」

- つくる見通しを立てて
「動くおもちゃ」「あの時の思い出」「ゆれる魚」
・「色は気持ちを表す」「ちいさな美術館」（鑑賞）

⑥6 学年

- 確かな目と豊かな心で
「わたしの見つけた景色」「人やものの組み合わせ」「親友の印象」
- 道具や材料の使い方をくふうして
「ゆかいなあやつり人形」「板を使って」
- 形や色の効果を生かして
「物語の絵」「わたしの絵本」
- 主題を確かめ構想を練って
「焼き物の貯金箱」「思い出に残ったこと」
- 自分の考えを発てんさせて
「動くおもちゃ」「自分や友だち」「顔をほってつくる」
・「色は生活を豊かにする」「思い出を残そう」（鑑賞）

この教科書における題材構成の特徴は、従来の表現と鑑賞の分野の分類と異なっていることである。ここでは美術教育の目的に合わせて、題材の分類をしており、しかも各学年によって目的を変えていることである。表現結果や表現行為のように、絵画、彫刻、デザインしてつくるという分類ではなく、また、絵、粘土といった材料別の分類でもない。それらは、児童が美術に親しみ、様々な想いをめぐらしながら、表現欲求を具体化するための目標である。「でき上がるまで粘り強く」とか「考えを深め、表したいことをはっきり」といった心情的な目的と、「つくる見通しを立てて」あるいは「形や色の組み合わせを考えて」といった方法的な目的の2種類に大別される。いずれにしても、従来の表現結果の絵画、彫刻、工作といった分類にとられない項目になっている。

③美術科の題材例1

○「美術1～3」（日本文教出版 平成元年）

①1 学年

- 絵画
「鉛筆やペンなどでかく」「器物とくだもの」「身近な風景」「版で表す」「物語や想像の世界」「生活をかく」「友だちをかく」
- 彫塑
「友だちをつくる」「動物をつくる」
- デザイン・工芸
「自然物や人工物の構成と色彩」「動きやトリックのあるデザイン」「イラストレーションと文字」「あいさつ状のデザイン」「板材でつくる」「焼き物をつくる」
- 鑑賞
「感じる目と心」「デザインの心」「身近なものを見つめて」

②2 学年

- 絵画
「身近なもの」「親しみのある風景」「版で表す」「想像の世界を広げる」「生活をかく」「運

動する人物をかく」

●彫塑

「運動する人物をつくる」「手をつくる」「頭像」

●デザイン・工芸

「抽象形による平面構成」「ポスター」「ユーモアとウイットのあるデザイン」「身近で使うものをつくる」「飾るものをつくる」

●鑑賞

「主題と表現」「アイデアと製作」「工芸と工業デザイン」「個性と表現」

③3学年

●絵画

「静物をかく」「広がりや奥行きのある風景」「自画像」「版で表す」「心のなかの世界」

●彫塑

「心のなかを立体で表す」「浮き彫り・レリーフ」

●デザイン・工芸

「立体感のある平面構成」「視覚伝達のデザイン」「記念品をつくる」「楽しく使えるものをつくる」

●鑑賞

「作者の精神の広がり」「デザインの広がり」「ハイテクノロジーとデザイン」「環境と造形」「東西の美術」「現代の美術」

中学校美術科も小学校と同様に表現と鑑賞の2領域に分れているが、実質は表現領域は絵画、彫塑（彫刻）、デザイン、工芸の4分野での題材が設けられている。無目的・無様式の表現分野である構成の取り扱いについては、多少、分類の相違はあるが、どの教科書も類似している。

この教科書での分類は、構成の題材はデザイン・工芸の分野に含まれている。また、デザイン・工芸の分野は別々に扱うのではなく、計画的に作るという概念で統一している。

④美術科の題材例2

○「美術1～3」（開隆堂出版 平成2年）

①1学年

●絵画

「美しさを見いだす目」「身近なものをかく」「身近な風景をかく」「人物をかく」「生活をかく」「空想の世界をかく」「版で表す」

●彫塑

「彫刻との出会い」「人物や動物をつくる」「手をつくる」

●構成

「自然の色や形から学ぶ」「色の感じを生かして配色する」「自然の形から構成する」

●デザイン

「色や形で伝える」「本のデザインをする」「文字のデザインをする」

●工芸

「木と語る」「身近な材料でつくる」「木でつくる」「土でつくる」

●鑑賞

「原始・古代の美術」

②2 学年

●絵画

「心の中の風景」「静物をかく」「風景をかく」「人物をかく」「心の中をかく」「版で表す」

●彫塑

「動勢と量感の表現」「じかづけでつくる」「頭像をつくる」

●構成

「整った色や形の美しさ」「調和のある配色をする」「造形の秩序を考えて構成する」

●デザイン

「視覚によるコミュニケーション」「ポスターをつくる」「図表や説明図をつくる」

●工芸

「形を生みだす喜び」「板金でつくる」「日用品をつくる」「鳥をつくる」

●鑑賞

「日本の絵画」「日本の彫刻」

③3 学年

●絵画

「創造する熱情」「一隅をかく」「風景をかく」「自画像をかく」「心の中をかく」「版で表す」

●彫塑

「抽象化とイメージの広がり」「浮き彫りをつくる」「出来事や風景をつくる」

●構成●デザイン

「造形感覚の広がり」「効果的な配色をする」「造形の冒険をする」「マークをデザインする」

●工芸

「生活を楽しむ」「あかりをつくる」「ジグソーパズルをつくる」「卒業記念のためにつくる」

●鑑賞

「素材と造形」「人物の表現」「新しい美の創造」「ゴッホの芸術」「ゲルニカ」

この教科書では表現の領域は従来通りの絵画、彫刻、構成、デザイン、工芸に分類されている。それぞれの表現分野の教育目標が明確になっている反面、重複するような題材や新しい題材などの分類が不明瞭になる恐れがある。昭和52年の学習指導要領の改訂で、小・中学校とも表現の領域は各分野の枠組みをはずして、自由な表現をすることができるようになったが、表現の基本的内容を明確にするためには、従来の方の分類の方が理解しやすい面を持っているとも言える。

2 美術科教科書の題材例の分析

前章では、現在使用されている小・中学校の教科書の題材例をそのままの分類で例示したが、ここでは造形要素と視覚言語に基づいて各題材を分析してみる。造形要素は点、線、面などの形態と色彩、および物理的、視覚的な材質感であるテクスチュアのことを示すが、造形要素だけで単独に学習する題材は少なく、構図、リズム、配色などの種々の視覚言語を伴いながら学習が進められている。ここでは、小学校図画工作科と中学校美術科の教科書をひとつずつとりあげて、形態、色彩、テクスチュアの3つの観点から分類し、同時にそこに含まれる視覚言語

の解説を加える。

① 図画工作科の題材の分析（日本文教出版社 平成4年）

① 1 学年

● 形態

「がようしのへんしん（画用紙をちぎって、はったり、かいたりして形をつくる）」（造形遊び）
「ごちそうづくり（いろいろな材料を使って、お菓子やお弁当をつくる）」（造形遊び）
「ながいかざり（紙を長く連なるように切って飾る）」（つくりたいものをつくる）
「ねんどあそび」（造形遊び）
「おったかみのかたちから（紙を折って形を見つける）」（造形遊び）
「しぜんはともだち（雪、砂、石を使って、ならべる、つむ、ほる、つなぐ）」（造形遊び）

● 色彩

「わたしのすきないろ」（導入）

● テクスチャ

「だいすきなあそび（土あそび、コンクリートにチョークでかく、地面に水をまいて描く）」（造形遊び）
「うつつた、うつつた（フロッタージュやローラーでのペインティング）」（造形遊び）
「しぜんはともだち（雪、砂、石を使って、ならべる、つむ、ほる、つなぐ）」（造形遊び）

② 2 学年

● 形態

「どんなあそびができるかな（紙ぶくろ、ナイロンテープ、新聞紙を使って遊ぶ）」（造形遊び）
「虫のすむいえ（段ボールをつかって、虫が集まってくる家をつくる）」（造形遊び）
「だんボールあそび（段ボールで家をつくる）」（造形遊び）
「たまごがかえった（卵からかえった怪獣をいろいろな材料を使ってつくる）」（造形遊び）

● 色彩

「とびだせいろ（スタンピング、ドリッピングの技法を用いて描く）」（造形遊び）
「花、いろいろな花、いろいろな色、どれも大好き」（導入）

● テクスチャ

「たまごがかえった（卵からかえった怪獣をいろいろな材料を使ってつくる）」（造形遊び）

③ 3 学年

● 形態

「みんなであそぼう（ダムづくりや紙にセロハンを貼ってのぞいて遊ぶ）」（造形遊び）
「もうひとりのわたし（段ボールに自分の形をぬきとる）」（つくりたいものをつくる）
「ふしぎな足あと（足あとからどんな生き物が想像して描く）」（絵に表す）
「生きかえるざいりょう（いろいろな材料を用いて人間や動物をつくる）」（造形遊び）

● 色彩

「モザイクの絵」（鑑賞）
「なかよし色のわ」（導入）

● テクスチャ

「生きかえるざいりょう（いろいろな材料を用いて人間や動物をつくる）」（造形遊び）

④ 4 学年

● 形態

「形をもとめて（打った点を線で結んで形を見つける）」（造形遊び）
「場所を生かして（1平方メートルの遊びを考えたり、発ぼうスチロールで水に浮くものを作る）」（造形遊び）
「ふ

しぎな生き物（いろいろな材料を使って生き物を作る）」（造形遊び）「ある日のある時（いろいろな材料でつくる）」（造形遊び）

●色彩

「にじの七色、あたたかい感じの色、寒い感じの色」（導入）

●テクスチャ

「ふしぎな生き物（いろいろな材料を使って生き物を作る）」（造形遊び）「ある日のある時（いろいろな材料でつくる）」（造形遊び）

⑤5学年

●形態

「不思議な絵（エッシャー、ホイッスラー）」（鑑賞）

●色彩

「色の明暗によるリズム（バザルリー）」（導入）

⑥6学年

●色彩

「山の四季（四季によって表情をかえる様子を描く）」（絵にあらわす）「生活に楽しさをあたえる色彩（サン＝ファール）」（導入）

小学校図画工作科の題材では身近なテーマを取り上げて、平面や立体で表すように構成されている。特に、低学年における造形遊びの分野では、児童の身近な生活の中から造形表現につながるように工夫されている。なかでも、並べる、積む、つなぐ、折る、重ねる、といった構成的な造形行為を用いて表現することは、造形要素や視覚言語の学習に発展する題材であるといえる。²⁾

高学年においては、「不思議な絵」や「色の明暗によるリズム」のように、形態、色彩の造形要素に焦点をあてた題材が見られる。児童の造形表現の発達段階から考えると、前写実期から写実期に移行する時期であり、写実的な描写表現だけでは児童の表現方法を満足することができない。写実による表現は児童・生徒にとって表現方法の両輪であるといえる。³⁾

そこで、知的な発達が顕著になる小学校高学年から中学校1、2学年にかけては、構成的造形方法が児童・生徒の表現方法を発展させるものと考えられる。それらは表現の領域だけでなく、鑑賞においても、造形要素や視覚言語による分析的方法が学習方法として可能である。

②美術科の題材の分析（日本文教出版 平成3年）

①1学年

●形態

「鉛筆やペンなどでかく」（絵画：全体と部分の形、強弱の線）「器物とくだもの」（絵画：直方体、円錐、球などの基本形体とそれらの組み合わせ、縦・横の比例）「身近な風景」（絵画：対比、遠近感）「版で表す」（絵画：画面構成）「物語や想像の世界」（絵画：形の大小、配置）「生活をかく」（絵画：動きのある構成）「友だちをかく」（絵画：全体と部分の割合）「友だちをつくる」（彫刻：全体のバランス）「動物をつくる」（彫刻：動きのある構成、全体と部分の長さや量のバランス）「自然物や人工物の構成と色彩」（デザイン・工芸：形の単純化、秩序ある形、平面構成）「イラストレーションと文字」（デザイン・工芸：形の単純化、組み合わせ）「あいさつ状のデザイン」（デザイン・工芸：形の構成）「板材でつくる」（デザイン・工芸：材料の形と大きさ、形の構造）「身近なものを見つめて」（鑑賞：表現技法の

観察)

●色彩

「鉛筆やペンなどでかく」(絵画：明暗)「身近な風景」(絵画：色の感情)「版で表す」(絵画：白と黒のバランス、配色)「友だちをかく」(絵画：色の感情)「自然物や人工物の構成と色彩」(デザイン・工芸：色の三要素、色の体系、色の感情、意図的な配色、調和)「焼き物をつくる」(デザイン・工芸：色の感情)「身近なものを見つめて」(鑑賞：色の感情)

●テクスチュア

「器物とくだもの」(絵画：透明感や材質感と彩色)「版で表す」(絵画：彫刻刀の技法による材質感)「動物をつくる」(彫刻：削りのあとの効果)「板材でつくる」(デザイン・工芸：彫り方、磨き方、塗装による材質感、木目の効果)「焼き物をつくる」(デザイン・工芸：釉薬、焼成による材質感)

②2学年

●形態

「身近なもの」(絵画：配置、構図、重なり)「親しみのある風景」(絵画：全体の構図、変化や統一、動きや安定感、遠近感)「版で表す」(絵画：見る角度や位置、画面の中心)「想像の世界を広げる」(絵画：形の構造、偶然性による形の創造)「生活をかく」(絵画：人物の動きや配置、人物の大小、奥行き)「運動する人物をかく」(絵画：画面構成)「運動する人物をつくる」(彫刻：比例、均衡)「手をつくる」(彫刻：腕・手のひら・指の長さの比例、全体と部分)「頭像」(彫刻：かたまりとしての形)「抽象形による平面構成」(デザイン・工芸：分割、配置、変化と統一、点や線の集まり、平面における立体感・空間感、リズム感、形の繰り返し、方向感、動感、対象、バランス、形のグラデーション)「ポスター」(デザイン・工芸：画面構成)「身近で使うものをつくる」(デザイン・工芸：形の構造)「飾るものをつくる」(デザイン・工芸：形の構造)「個性と表現」(鑑賞：表現技法)

●色彩

「親しみのある風景」(絵画：色の変化、全体の色調)「版で表す」(絵画：細かな明暗の変化)「想像の世界を広げる」(絵画：効果的なむらやしみ)「生活をかく」(絵画：重色)「抽象形による平面構成」(デザイン・工芸：配色、色のグラデーション)「ポスター」(デザイン・工芸：色の三要素、色面の大小、目立つ配色)

●テクスチュア

「版で表す」(絵画：彫りの工夫による材質感)見る角度や位置、画面の中心)「想像の世界を広げる」(絵画：特殊技法による材質感)「手をつくる」(彫刻：やすりや砥石による表面処理と材質感)「身近で使うものをつくる」(デザイン・工芸：材料の性質と特性)

③3学年

●形態

「静物をかく」(絵画：構図の工夫)「広がりや奥行きのある風景」(絵画：ものの重なり、遠近感、形の変化)「版で表す」(絵画：形の単純化、強調)「心のなかの世界」(絵画：画面構成)「心のなかを立体で表す」(彫刻：具体的なものから形を見つけだす、自由に形を作り出す)「浮き彫り」(彫刻：凹凸の高さの工夫)「立体感のある平面構成」(デザイン・工芸：立体感)「視覚伝達のデザイン」(デザイン・工芸：形の象徴化、簡素化)「楽しく使えるものをつくる」(デザイン・工芸：形や構造の工夫)「東西の美術」(鑑賞：造形要素、視覚言語による鑑賞)

●色彩

「静物をかく」（絵画：画面全体の色調の統一）「広がりや奥行きのある風景」（絵画：色の強弱、色の微妙な変化）「自画像」（絵画：色の感情）「版で表す」（絵画：色の単純化）「心のなかの世界」（絵画：色の感情）「立体感のある平面構成」（デザイン・工芸：色の対比、進出・後退、膨張・収縮）「ハイテクノロジーとデザイン」（デザイン・工芸：光の色）

●テクスチュア

「心のなかを立体で表す」（彫刻：材料の特性、表面処理）「楽しく使えるものをつくる」（デザイン・工芸：材料の特性を生かす）

中学校の美術の教科書では、小学校に比べて造形要素と視覚言語の学習内容が増えている。各表現分野の作品を表現するに至るまでには、様々な視覚言語の内容が含まれているにもかかわらず、解説や技法の説明は簡略化されているので、構成の分野以外では視覚言語の捉え方が重要視されていない傾向にある。造形要素や視覚言語は表現分野のひとつではなく、また、従来のようにデザインの基礎として捉えるだけでなく、表現分野全体に含まれる造形方法である。各題材の分析をすると、1、2学年では視覚言語の内容が多く含まれているが、3学年ではそれらを基盤とした芸術的表現に重きを置いている傾向にある。

鑑賞では造形要素や視覚言語で捉える分析的方法よりもむしろ、文化史の一部として鑑賞題材を位置づけており、歴史的な題材、現代における美術文化などを総合的に受け入れるような題材構成になっている。

3 教科書の題材構成

前章では小・中学校の美術教育の教科書を造形要素と視覚言語の観点で分析した。ここでは実際に児童・生徒が使用している教科書の各題材はどのように扱われているかを見ることにする。

図画工作科にしても、美術科にしても、美術科教育で扱う題材は美術文化、造形美術の文化遺産を伝授、伝達することが目的のひとつであると思われる。それは単に鑑賞を通して、知的方法によってのみ伝授、伝達するという意味ではなく、表現技術や創造の喜びといった心情的な経験を通して伝達するという方法も含んでいる。

図画工作科、美術科の題材構成を見ると、表現の領域が鑑賞に比べてはるかに多くを占めているのが現状である。これは学習指導要領に基づいた時間数の問題から来ることでもあるが、その背後には表現技術の体験、習得による文化遺産や価値観の伝授が意図されていると思われる。小・中学校での美術教育の最終的な目的のひとつは、確かに文化遺産としての美術文化の価値観の伝授であるが、そこに至るまでに多くの付加価値があり、また、派生する教育目標がある。それらは表現技術や技法の習得であり、造形的表現に基づく創造性の育成などである。それらを通して美術文化の価値創造に至り、ひいては文化の愛護、育成という点につながるのである。

図画工作科の1、2学年について題材の内容構成を見ると、技術的、技巧的な側面よりも人間のもっている造形的行為に親しむための内容が取り扱われ、しかも、低学年であるから文章で解説するという形式ではなく、題材の簡略な説明と参考作品の図で直観的に把握するように構成されている。各題材の取り扱い時間数も短いものが多いので、制作プロセスや技法の解説

は最低限度にとどめている。低学年では造形遊びの題材が多く、作品としての発展性を考慮しながら、造形活動に親しむ意図が反映されているものと思われる。

3、4学年で見ると、基本的な描画技法、工作技法、用具の使用などについての解説が文章と図で示してある。その点に関して言えば、図画工作科は中学校での教科としての技術科を工作の分野が包括していると考えることができる。しかしながら、絵画や彫刻の分野を見ると、構図、配色、バランスといった内容を含む参考作品は掲載されてはいるが、その解説は簡略すぎる傾向にある。描写表現の部分的な参考例の図はいくつか掲載してあり、技法的な説明がなされているが、それらは内容を組み立てるための造形要素や視覚言語としての捉え方までは至っていない。

高学年においても、基本的には3、4学年と同様の傾向にあるが、技法を中心とする工芸関連の題材においては、やや説明が詳細になっている。しかしながら、全般的には参考作品の図版から読み取りながら、自己の表現を組み立てるという方法がとられていると解することができる。例えば、絵で表す題材では、生活画、風景画、構想画、静物画、木版画などが具体的に挙げられているが、アイデアスケッチから制作プロセスを経て、完成作品に至るような創造過程は示されてはなく、ほとんどが表現目標を簡便に文章で解説し、他は完成作品が参考作品として掲載されているだけである。つまり、題材設定から完成までの方法論は児童の主体性に委ねられたブラックボックス化しているといえる。そのことはデザインや工作の題材についても同質のことがいえる。デザインや工作は題材設定それ自体が目的を明確にする性質上、制作工程をガラスボックス化する部分はあるが、それらは主に技法的な内容に終始しているといえる。

図画工作科において、造形要素や視覚言語の取り扱い、それ自体を目標とする直接的な題材は見ることができない。さらには、各分野での題材においても、制作プロセス上に分析的に取り入れられている事例はほとんど見ることができない状況であり、児童は参考事例を基に、直観的に方法を把握することを余儀なくさせられている面が強い。あるいは、担当教師の個々の教授能力によって補完されているのが現状であると考えられる。

中学校美術科の教科書では、表現領域は各分野に分れていて、分野の重複した題材、あるいは従来分野に分類できない題材などは見当たらない。ただ、新しい映像によるメディアの題材などが斬新さを感じさせる。基本的には絵画、彫刻、構成、デザイン、工芸、鑑賞という従来の枠組みのなかで、題材の展開が試みられている。

各題材の内容構成についてみると、題材設定の簡略な説明文と特に留意する表現上の技術や技法に関する注意点が解説してあり、他は生徒作品と歴史的価値の定まった参考作品によって題材の全体構成がなされている。

中学校美術科の教科書では、生徒の発達を考慮して、芸術性を重視した内容構成がとられている。絵画の題材についてみると、題材としては静物画、風景画、人物画、生活画、構想画などがあるが、いずれの題材においても解説文は技法的内容が少なく、絵画の内容的、心象的解説が多くなっている。また、生徒作品だけでなく、それぞれの題材に関連した著名な作品を掲載することによって、造形表現を昇華して芸術性に触れさせようとしている意図がうかがえる。スケッチの段階でのいくつかの構図のヴァリエーションなどは見ることができ、全体的に造形要素や視覚言語の説明はほとんど無い状態である。

構成や色彩といった要素的な題材を中学校では解説しているが、それはしばしばデザインの基礎という捉え方で題材の配列がなされている。造形要素や視覚言語が、その成立過程でバウハウスやヴァツァンガスのデザインを志向した専門家養成の美術教育の過程から産出されたこと

を考慮するならば、現時点においても、デザイン、工芸の基礎分野であるという捉え方もひとつの考えとして受容されるであろう。しかしながら、絵画や彫刻などのいわゆる純粋美術の分野においても、その領域は科学的手法やメディアの拡大ということから、領域の不明確化が進んでいる現在、絵画、彫刻の創造的な表現の発展性を期待するならば、創造過程のブラックボックスを明確にする必要があると思われる。そのことは同時に、教育実践での「分かりやすさ」を促進する方法となり得るように思われる。

4 視覚言語の意義

以上、小・中学校の教科書を見てきたが、造形要素や視覚言語が、普通教育の題材として、それ程、多くを占有していない傾向にあると思われる。しかし、それは題材の内容構成の表現的な解説から見られるに過ぎないとも考えられる。各題材の教育目標は、素材、技法、技術、創造的側面、美的側面などを、児童、生徒の発達段階に適合させながら、総合的に取り扱っているのであって、題材を分析するならば、そこには造形要素と視覚言語は必ず介在しているといえる。

造形要素や視覚言語が直接的に、形態、色彩、テクスチュアとなって題材と化したものも従来の教科書には見られるが⁴⁾、現在では、そうした項目が独立して扱われることがない状況である。視覚言語はゲシュタルト心理学からの法則や視覚の法則を援用している内容を含むものであるが、美術教育の方法として捉える場合、それらは必ずしも固定化、定式化されたものではなく、表現内容の基盤として融通性を持ちながら有機的に取り扱われる内容である。それはG・ケペッシュの言う「組織的総合化のプロセス」⁵⁾として表現の創造過程に参加するものである。

発達段階から見ると、小学校低・中学年では、素材や技術に関する内容と日常生活の場面からの美術の関わりを題材としている。そこには簡易な造形要素や視覚言語の関わりが、自然界からの成立のように単純な形で取り入れられている。例えば、安定した構図とか、色彩のもつ心理などがそれである。小学校高学年から中学校1、2学年では、題材を分析すれば、視覚言語の取り扱いが、表現内容に多く含まれている。逆に、3学年になると、それらは少なくなり、美術教育での芸術的側面に触れようと努めている。造形要素や視覚言語は、それ自体が表現の目的ではなく、あくまでも表現のための組織的総合化のプロセスであると確認することができる。

そうした位置づけから考えるならば、現在使用されている教科書において、各題材の表現のための視覚言語の解説を詳細にした方が、児童・生徒の学習をより発展させることが期待できるであろう。また、同時に図画工作科、美術科を担当する教師にとっても、創造過程を明確に提示することにも関連すると考えられる。

注

- 1) 現在発行されている図画工作、美術の教科書は、日本文教出版、開隆堂出版、光村図書出版、現代美術社の4社である。採択の割合で言えば、日本文教出版、開隆堂出版が多くを占めている。

- 2) 福田隆真、福岡千賀 「図画工作科の造形遊びについての考察」 日本教科教育学会誌 第14巻 第4号 p.p.17-23
- 3) 真鍋一男 「構成的方法とその教育的意義」 (造形教育センター編集「造形教育の理念」収録) サクラクレパス出版部 1985 p.p.140-149
- 4) 昭和26年度版の学習指導要領などでは指導内容の項目として独立していた。(山形寛 「日本美術教育史」 黎明書房 1967 p.p.793-797)
- 5) G・ケベッシュ グラフィック社編集部訳 「視覚言語」 グラフィック社 1973 P15

参考文献

- ・柴田和豊 「美術の教科書をめぐって(第一報)」 三重大学教育学部研究紀要 第37巻 教育科学 1986
- ・同上 「同上(第二報)」 同上 第38巻 同上 1987
- ・G. カニツァ 野口薫訳 「視覚の文法ーゲシュタルト知覚論ー」 サイエンス社 1985
- ・U. ナイサー 古崎敬 村瀬見訳 「認知の構図」 サイエンス社 1978
- ・D. A. ドンデイス 金子隆芳訳 「形は語る」 サイエンス社 1979
- ・日本児童美術研究会 「ずがこうさく1、2」「図画工作3ー6」 日本文教出版株式会社 1988
- ・日本造形教育研究会 「ずがこうさく1ー2」「図画工作3ー6」 開隆堂出版株式会社 1988
- ・河北倫明ほか 「ずがこうさく1ー2」「図画工作3ー6」 光村図書出版株式会社 1991
- ・「子供の美術1ー6」 現代美術社 1990

付 記

この研究報告は文部省平成3年度科学研究補助金(一般研究C)(課題番号03680269)による研究の一部である。